

言語活動の充実

21世紀を「生き抜く力」をはぐくむために



言語活動の充実

- なぜ言語活動の充実が必要か
 - 子どもの現状から
 - 生きる力の基盤として
 - これからの時代に求められる力として
- 言語活動の充実を教育活動全体ではぐくむために



言語力は、

知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤として、自らの考えを深め、他者とコミュニケーションを行うために言語を運用するのに必要な能力

平成19年、言語力育成協力者会議の「言語力の育成方策について」

平成16年「これからの時代に求められる国語力」

平成20年中央教育審議会答申

言語(国語力)

知的活動の基盤

感性・情緒の基盤

コミュニケーションの基盤

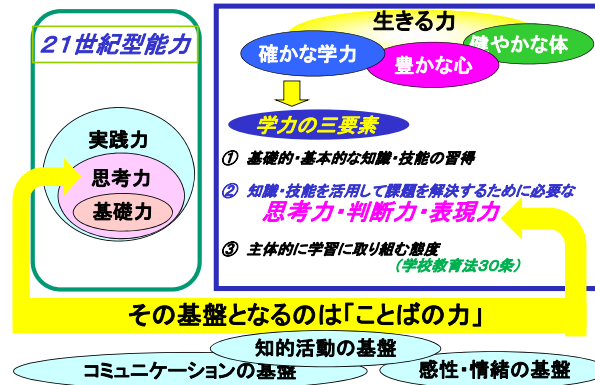
言語活動の充実

思考力・判断力・表現力を高める学習活動

- 体験から感じたことを表現する。
- 事実を正確に理解し伝達する。
- 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- 情報を分析・評価し、論述する。
- 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

平成20年中央教育審議会答申

21世紀型能力 と 学習指導要領



言語活動の充実の目的

思考力・判断力・表現力の育成
各教科の目標や内容のよりよい実現



学校全体で行う言語活動

- ① 学校の教育目標の達成のために言語活動の充実を図るという視点に立つこと。
- ② 児童生徒の実態から、学校として育成すべき学力を明確にすること。
- ③ 各教科等が達成すべきねらいに応じた言語活動を位置付けること。
- ④ 国語科での指導を基盤にしなが、教科間の関連をはかり、系統的で意図的・計画的に実施されるよう全教職員が共通で取り組むこと。

言語活動の位置付け

「言語活動」は、

- ・ 思考力・判断力・表現力を育てる
- ・ 各教科等の目標達成のための手立て



児童生徒の主体的な学習を促す授業改善の手立て

言語活動を支えるもの

語彙を豊かにする、学習用語の確実な習得

読書活動、学校図書館等の活用の推進

学校における言語環境の整備



小中一貫教育を見据えた 小中連携の在り方を考える

—小中一貫教育の実践を通して見えてきたこと—

京都教育大学
教職キャリア高度化センター
初田幸隆

本講義のねらいと構成

KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

小中連携を進める際に必要となる視点や具体的な進め方を理解する。

ガイダンス

- 1部 小中一貫校づくりを通して見えてきたこと
～小・中相互の理解を深めるために～
- 2部 義務教育学校や小中一貫校を含めた
小中連携の現状と課題
- 3部 小中連携をすすめるために

京都教育大学
教職キャリア高度化センター
初田幸隆

小中一貫校づくりを通して見えてきたこと

～小・中の文化の違いを知る～

このようなことはありませんか・・・

小学校からは「とても落ち着いた子どもたちだと聞いていたのに・・・」
「保護者も協力的だと聞いていたのに・・・」

中学校では「どのような指導がされているのだろうか・・・」
「あれだけ落ち着いた子どもたちだったのに・・・」

KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

小中それぞれに見られる違い…傾向として

小学校では

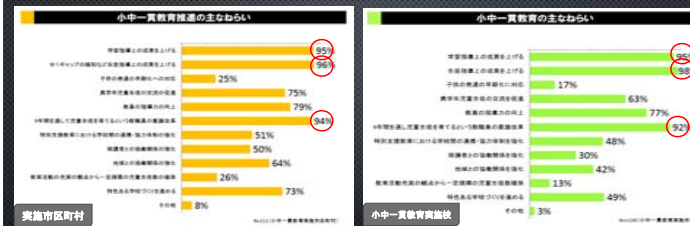
中学校では

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 毎日6時間の授業を一回ずつ | 1度の教材研究で複数回の授業 |
| 他クラスとの整合性を意識…教材研究はチームで | ひとと学年を一人で担当…教材研究は一人で |
| 足算の思考…積み上げを意識 | 引き算の思考…出口を意識した指導 |
| 薄い教科書…活用を意図した言語活動 | 厚い教科書…習得に重きを置く授業 |



KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

小中一貫教育のねらい (市区町村と小中一貫教育実施校)



小中一貫教育のねらいとしては
中1ギャップ等生徒指導上の課題の解消 (96%,98%)
学習指導上の成果向上 (95%)
教職員の意識改革 (94%,92%) でトップ3

KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

小中一貫教育の成果として見られること (市区町村と小中一貫教育実施校)

成果のトップ7

	小中一貫教育実施市区町村 N=211	小中一貫教育実施校 N=1130
1	教職員間で互いの良さを取り入れる意識が高まった	中学校への進学に不安を感じる児童が減少した
2	中学校への進学に不安を感じる児童が減少した	いわゆる「中1」ギャップが緩和された
3	基礎学力保障の必要性に対する意識が高まった	教職員間で互いの良さを取り入れる意識が高まった
4	いわゆる「中1」ギャップが緩和された	教職員間で協力して指導に当たる意識が高まった
5	教員の指導方法の改善意欲が高まった	基礎学力保障の必要性に対する意識が高まった
6	小・中学校共通で実践する取組が増えた	小・中学校共通で実践する取組が増えた
7	上級生が下級生の手本となろうとする意識が高まった	教員の指導方法の改善意欲が高まった

京都教育大学 初田幸隆
「小中一貫校づくりの推進と課題」から見る小中一貫教育の現状と課題(1)

KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

小中連携の進め方

小中それぞれで行っておくべきこと

- 1 「なぜ小中一貫教育を進めるのか」という小中一貫教育の意義を認識する

小中一貫教育についての校内研修会等の実施…本Web講義の活用も要検討

- 2 小中一貫教育を進めるための連携であることを確認する

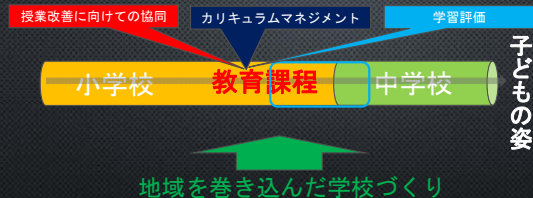
※小・中学校がめざす子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、**系統的な教育を目指す教育**

- 3 自校の課題を明確にする

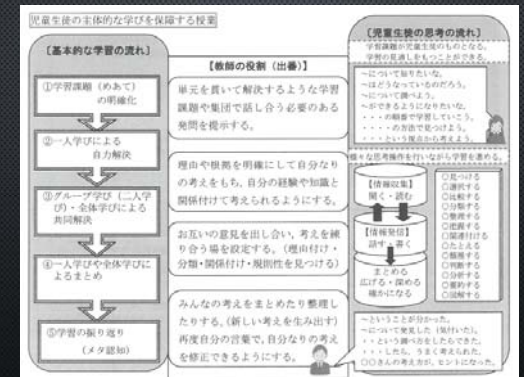
学校運営協議会やPTA等、地域や保護者を巻き込む仕組みにおいても認識を共有

KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

特に実践していただきたいこと



KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION



KYOTO UNIVERSITY OF EDUCATION

教師の成長

京都教育大学
高柳 真人

講義のねらい

教師が成長する際に有効である
と考えられる知見を提供



教師の成長とは？

教師の成長とは

「職務を
よりよく遂行できるように
なること」
(高橋、2013)

教師の成長の契機

困難な課題への対応



危機



成長の契機

周りからのサポートや周りとの協働
自分自身のありようの理解

成長の契機：協働できる関係づくり

困難な課題を解決するためには、
協働できる関係づくりが大切

先輩・同僚教師からの助けや学び合い
＝危機的状況を乗り越える力

協働するためには

- ・自ら援助を求めることが必要
「被援助志向性」
- ・周囲が支援するために動くことが必要
「ソーシャル・サポート」

成長の契機：自己理解

困難な課題を解決するためには、
自己理解が大切

例えば、自分の考え方・認知の傾向を理解



職務の円滑な遂行
メンタルヘルスを守ること

自己を理解して課題に取り組む

認知が行動や感情に与える影響は大きい



事実に基き、何ができるかを考える



多様な情報収集が可能
現実的・客観的な対応策の検討が可能

「教師の成長」のために

- ☆協働できる関係づくり
 - ・自ら援助を求めることが必要
 - ・周囲が支援するために動くことが必要
- ☆自己理解
 - ・その人の認知が行動にも感情にも影響
 - ・事実に基き、何ができるかを考える